礫陵新聞

発行所
若松高校新聞部
北九州市若松区小石
発行　編集
若松高校新聞部
印刷所
吉田印刷所　㊷5424

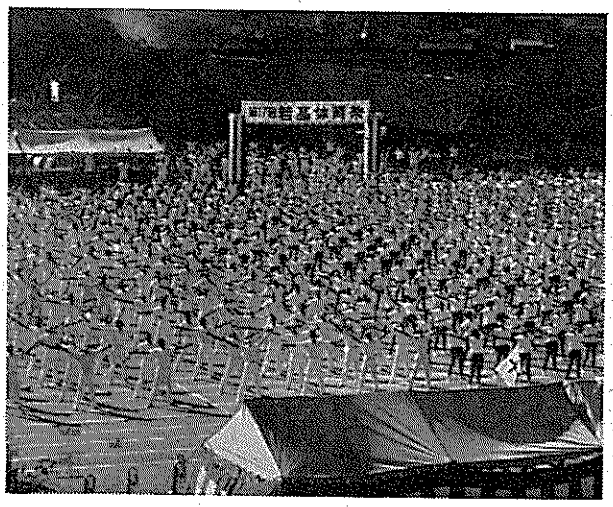
> 人間が賢いのは、その経験に応じてではない。経験に対する能力に応じてである。
> バーナード・ショウ

"闘魂"まさにその名！

第17回体育祭

三年奮起およばず

深く澄み渡ったブルーの空の下で若人が繰り広げる"エネルギーの祭典"第十七回体育祭が、九月二十六日（日）盛大に行なわれた。得点は、一年三〇四点、二年四四八点、三年四一八点と結果的には二年生の優勝。しかし、正々堂々と闘った健児達の意気もさることながら、惜敗した三年生諸君の応援演技には感嘆の意を発せずにはいられなかった。また、初出場の一年生の応援ぶりも紳士的なもので好感が持てた。若高の体育祭のよびもの"山車"も色々な問題を含みつつも、盛大に行なわれた。



徹底した"生徒の手による体育祭"。今年の体育祭は、まさにその名の通りであった。"生徒の手に……"は、二年前から手がけられてきたのであるが、今回は結びついた実行委員会と一般生徒の力によるところが大きい。

数重ねられた諸委員会、つるべ落しの秋の陽が暮れても続けられた各係の仕事。そして選手諸君による競技の練習。まさに若高生が一体となって取り組んだ第十七回体育祭であった。

○　○

去年の秋雨の降った体育祭と違い、気持よく晴れた当日、赤・白・青のハチ巻きに、真白のユニフオーム姿もりりしく、さっそうと小田原君を先頭に礫陵健児達の入場行進。足どりも軽く胸を張り、赤・白・青のハチ巻き姿の各々が"我学年こそ優勝を……"と口を真一文字に結んで進みゆく姿は、全く"たのもしい"の一言に尽きる。

やがて、八時五〇分―福馬君により開会宣言が述べられ、いよいよ体育祭が開始された。

まず女子選手による六〇M走。二、三年ふるわず、一番若い（？）一年生が、まず点を得る。次回からは、エネルギッシュな二、三年により、ハラハラするプログラムが次々に展開される。男子選手による一五〇〇Mでは、二年生が圧倒的な勝利をおさめる。その合間〳〵に見せる、女子による華麗なダンス。男子による迫力あるタンブリング等。確実に組まれた多彩なプログラム。

さて、昼食前の見物オリンピックリレーでは、四百Mではやはり年令の差（？）が表われたかと思われたやいなや、八百M走者にバトンが受け継がれるや、藤井先生の力走。声援は、どなたに？

そして見事教師組一位。面目を保つという一場面も見られた。これも体育祭ならではであろう。

○　○

さて、皆さんお待ちかねの昼食後の楽しい一時。そうです！フォークダンス。平日、行っても集まらない主催者泣かせのこのフォークダンスも、この日となると全く違う。始めはテレてか小さな円も五分一〇分とたつにつれ、グランドいっぱいに広がった輪。二重、三重になって、男子も女子も手をつなぎ時を忘れて踊る姿。高校生らしい、ほほえましい"若い輪"である。時間も過ぎ、"チェッ、もう終わりか"という声も聞かれて"輪"は、グランドのあちこちに散ってしまった。午後の演技の開始である。

○　○

十四ある運動部紹介。日頃の得意なスポーツとはうって変わった競技をやるので、さすがのスポーツマンもタジタジ。珍芸ならぬ珍技のお目見えで、一同大喜び。わきたつ会場で汗だくの熱演。

午後の部も雰囲気の盛り上がったところで、若高の呼び物"山車"の出現。三年間、泣かし泣かされ続けた恩師の姿をかついで、モウモウと砂ぼこりの巻きたつグランドを狭しと走り回る。

番犬・厚顔の美少年、岩尾太子・カレンなミス舘野・ヒイさん・可愛いネズミ・シュバイツァー・二万円のジェントルマンに脚線美のダッコちゃん等、さまざまに恩師を作って三年間の思い出を新たにした。この"山車"を作るにあたって今年も起るべきものが起った。教師と生徒間の問題である。毎年起るこの問題どちらに考える余地があるのだろうか？二年生の諸君も同じ事にぶつかるのでは？その時こそ強い団結を望みたい。

やがて、数々のプログラムも終りに近ずき、興奮の渦もさめやらぬうち大陽もダンダン西へ傾いた午後四時四〇分、全プログラムを無事終了し第十七回体育祭も幕がおろされた。

○　○

若高史、二度目の悲劇？

後輩可愛さのあまり三年生は、二年生に勝ちを譲ってしまった。しかし、思う存分闘った後の三年生の顔には、快感は残っても、不快感は見られなかった。

○　○

午後六時―。夕もやのたちこめたグランドには、真中に集められた"山車"に火がつけられ、フォークダンスの曲が流れ、ファイアーストームが始まった。

ファイアーストームに参加した三年生の諸君に色々と伺って見ることにしよう。

○ファイアーストームどうでしたか？

「楽しかったですね。もう一度やりたいくらい」「合唱等なくて、各級別々に歌っていたし、女子クラス等歌っていないところもあったりしてまとまっていなかった。もっと歌等をうたったらナア」「フォークダンスばかりでくたびれました。それに同じ曲ばかりでしょう。ちょっとガッカリしました」

「前もって、スケジュールをきちんとたてて、一応公表してから、やってほしかったですね」

「おもしろくなかった。とにかくフォークダンスばかりでつまらなかった。でも運動会は、とても楽しかった」等、人それぞれ違っている。とにかくどちらにしても、この一日は楽しい日であったのは事実であり、深く思い出として残ることだろう。

種目別好成績者・タイム

・六〇M走	陣の内	八秒二
	藤井	一〇秒八
・一〇〇M走	角田	一一秒三
	東	一一秒七
	陣の内	一三秒九
	広見	一四秒三
・一五〇〇M走	山口	四分五七秒七
・スウェーデンR	二年B	一分二一秒三
・オリンピックR	二年A	三分五八秒五
・四〇〇〇MR	二年A	一分三秒三
・八〇〇MR	二年A	一分四四秒九

応援団長の話

一年　調　君

友達から勧められて、簡単に引き受けたもののいざ入ってみると大変だった。団長のぼくが経験が少ない上に団員の四分の三は未経験者という状態である。その日から二週間、団員には苦しい毎日の連続だった。最初に誰れかが、良い形を考えだすと皆がそれを練習するという方法だが、初めの二、三日は雨で、室内では笛太鼓の使用禁止のため、実際には充分練習出来なかった。それで日曜日も、朝九時から弁当持参で来て、六時迄みっちり練習した。そうとうの効果があったはずだが、実際はその逆であった。一週間の疲労の上に八時間近くも練習したので疲れが一度に出てしまった。勉強は手につかないし、首も手も曲らないし、授業中も眠たくなった。しかし、みんなよく頑張った。

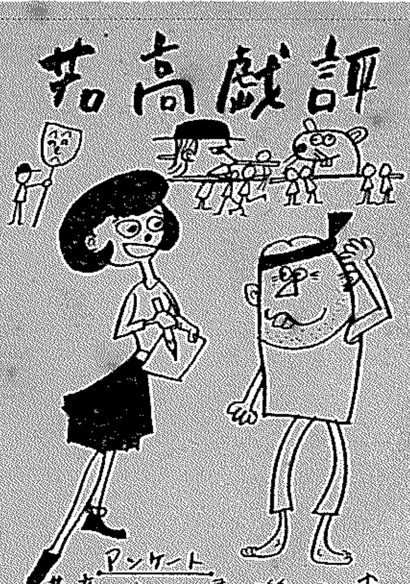
この体育祭で「団結の尊さ」と「気力のおそろしさ」を痛感させられた。

二年　小舟君

ここに優勝できたことは"打倒三年"をスローガンに「今年こそは」と闘志を燃やした五百五十余名の力の結晶であると思う。応援演技では、三年、一年に遅れをとったが、それをカバーし優勝した全員の団結は素晴らしかった。我々は予行練習の際にも勝利を得ることが出来たが、得点の面からみても、決して楽観視できるものではなかった。それ故、我々は運動会当日にたとえ、まずくとも全力を奮い、最大限の力を出しそうと誓ったのである幸いにして少なからず差をつけて栄誉に輝いたが、応援団長、学年主将として遺憾に思われることは、全ての面において優勝できなかったこと、勝利者と呼ばれるにはまだ、ふさわしくないということである。来年の機会には現三年生の受け継ぐべき点を、しっかりと掴んで頑張ることを約束する。

三年　釘本君

若高生としての最後の運動会がこの様に立派なものであったことは我らにとって思い出深いものとなるであろう。二年の激しいファイトに終始おされはしたものの、全ての者が競技に全力をつくしていた姿は実に美しかった。三年として負けた事は残念であったが、悔いのない、実にさっぱりとした運動会を行なえたという誇りのみが残っている。三年の者全てが同じ気持だと思う。過去三年を通じて、今年程充実した、心から精一杯楽しめた運動会はなかった。短期間で応援団もよくやってくれた我々がこの若高を去り、実社会に飛び込んで行ったとしても高校生活最後の年に行なわれたこの運動会のことは、生涯忘れられないことだろう。


若高戯評
アンケート
若高に入った動機は？
山車を作る為です。

礫陵言

二学期は毎年目のまわるような忙しさの連続である。運動会と修学旅行を消化するための諸行事は枚挙にいとまがない。毎日何かが遂行され、実施されている。それらを全校の生徒が、少なくとも一学年全体が満足に消化していくには大へんな努力と、細心の注意がなくてはなるまい。団体行動のむつかしさということをしみじみ感じさせるのはこの学期である。

▼学校という社会集団にあっては、個人の自由ということにより社会全体の方が優先することがしばしばある。秩序のある団体行動の中に個人の自由を保持するということが要求されるのはそのためだ。各成員がそのことをよく理解していないと、混乱をまねきやすく、ひいては全体への不利益を誘発することになりかねない。その実例をいたるところで発見するのも二学期である。

▼ところで、こういう社会的利益に反する行動をとる者の中で、しばしばその理由として、「全体の利益や、強制より、個人の自由が、優先する。個人の自由を抑圧するのは民主主義の否定だ」と。それは理論としては正しいかもしれぬ。しかしそのような異端を唱える者が、真に個人の自由の権利を行使しているかどうかは、実に疑わしい。そういった手あいに限って、学問（勉強）の自由や、良心の自由という諸権利を放棄してしまっていることが多い。つまりこういう連中は何事によらず否定することだけに、その生きがいを感じている者で、「民主主義」なる、人類の輝やかしい歴史の所産を口にするにも値しない無頼の徒であるにすぎない。

▼三年生は待望の修学旅行に出発する。コースは昨年とほぼ同じだが、修学旅行のコースについてもそろそろ再検討の時期が来ているようだ。聞くところによると、九州工業は、今年から「黒四ダム」を日程にはさんでいる様だ。「黒四ダム」は立山連峰を背景にした日本一のアーチダムで、自然と人工美の調和した景観は、日本最高の観光地といってよいだろう。こういう所も、これからの修学旅行にはさみたいものだ。それもこれも前述の団体行動がうまくやれるかどうかにかかっている。（よ）

レコード楽器
金豊堂
本町六丁目　TEL　㊶　3390

時計は
マルミツ
本町五丁目TEL　㊶　4054

龍そば
本店　本町五丁目　TEL　㊷　4320
支店　渡場前　TEL　㊷　4047

こう考える　新聞部第一次アンケート

大きな特色は見られず

最近よく現代高校生についての批判が新聞その他のマスコミ等で聞かれる。それは彼等の無力化、利己主義化それに環境順適応性などである。本校新聞部ではそういう空気を若松高校に引移して、若高生に未だ健全な考えを持っているのかを調査することにした。

同時に新聞部では、本校生の高校生活に関しての見解を総合的に認知することを望んで九月八日の全校生対象のアンケートを実施したのであるが、質問が全般に到らなかったことはまことに遺憾である。しかし、生徒の皆様の絶大なる協力を期待して提出一〇〇%を確信していたのであるが、全く外れてしまって、僅か六五%程であった。新聞部にとっては、提出しないよりもたとえそれが白紙であっても提出する方が嬉しいのである。それでも真剣に考えて書いてくれた多くの人々には、心から感謝の意を表したい。

一層の協力を望む

集計した結果を順を追って紹介しよう。

一、本校での生活についての感想不満

日頃考えていることを全て書いて欲しかったのであるが、白紙の状態のままで提出した人が実に多い。他の質問には答えてくれているのだから、書くことがなかったのであろうか。それでも書いているのは、実に多方面にわたっている。中でも多いのは、学校全体のまとまり、団結の不足、学校の設備への不満、生徒の意見を軽視している、服装・長髪問題、先生と生徒との隔たり、盗難の被害、それに朝の課外講習の全面的廃止、等々について訴えている。これ等については別表を参照していただけばよいが、他に直接的には大問題ではないが極めて重視すべき問題として、全校集会の際に比較的男子に対しては背の低い女生徒が後ろに並び、前には男子が列を作るという慣習は全く矛盾していて、おかげで女子はちっとも見えないという意見、売店での応待があまり気持のいいものでない等があった。

一、本校での高校生活に関して

- ◦灰色・地獄のようだ
- ◦物がよくなくなる
- ◦長髪・皮靴を認めよ
- ◦楽しい
- ◦おもしろくない
- ◦他校に比べてよい
- ◦生徒会へ関心をもってほしい
- ◦放送時間の考慮
- ◦朝の補習全廃
- ◦友達が冷たく感じる
- ◦先生の横暴・暴力行為
- ◦売店での応待が悪い
- ◦先生との距離が遠い
- ◦ガリ勉が多い
- ◦先生の時間厳守がよい
- ◦雑音が多い
- ◦学校が予備校化している
- ◦協力が欠ける
- ◦男女の交流がよくない
- ◦学年の交友の機会がない
- ◦活気がない
- ◦清掃の不徹底
- ◦H.Rの時間がもっと欲しい
- ◦生活が単調すぎる

受験地獄三年生は「仕方がない」

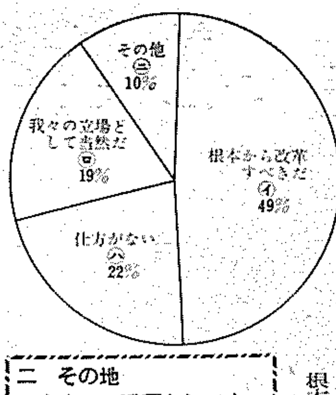
二、現在の教育制度に関して　苛酷なまでの受験地獄をどう考えるか

これには最初から項目を設けてイロハニに各々丸印をつける方式であったが、学年別の結果をみると、まことに興味深いものがある。すなわち、一、二年生においては、二年生の方がやや勝りながらも、イの「根本から改革すべきだと思う」に一、二年とも男女そろって五〇%を越える人が賛成している。それに反して、来年春に大学の受験に臨む三年生は男女共四〇%に満たぬ生徒がイに賛同しているに過ぎない。こういう現象は何故起こるか読者自身にも容易に想像がつこう。これについてはまだまだ熟考の必要があると思う。

その他、ロハニについては各学年とも大差はないが、三年生のロ「我々の立場として当然だ」の支持者が多く特に女子では、四〇%という高率は注目すべきである。

とされ、全体的にはイが半数を占めたということは喜ばしいことではないか。

二、現在の教育制度
俗に言う受験地獄を私はこう思う



二　その他

- ◦人生の一過程としてあってもよい
- ◦ある程度の改革が必要
- ◦試験がペーパーで決まるのに疑問
- ◦2年から就職進学にわけるのは行きすぎ
- ◦環境に順応しなくてはいけない
- ◦無試験制にする
- ◦どうでもよい

三、制服について

制服というものは、我々学生にとって、日常茶飯事のごとく使用されているものであるだけに、興味のおき方も一とおりではない。

そこで、そのアンケートをと

主張

求職に積極性を

二学期も半ば、ようやく軌道にのり、何をするにも絶好の季節となってきた。

三年生にとっては、余すところ後三カ月の高校生活となったが、ここで、その就職者について考えてみよう。

今年は、戦後のベビーブームにのって大学はもはやすべてが狭き門であるが就職者にとってももちろんで、この場合は、それに不況ブームということも重なっており最近では就職難が社会問題にまで発展する、という深刻さである。我校でもこの例にもれず、現在、就職希望者男子27人女子90人のうち、決定者は男子6人女子18人、と低調である。これによるとまだ八割の人が行き先が決まらないという状態なのであるが、この数字は昨年のこの時期に比べ、非常に暗い状況をものがたっている。

さらに去る26日国家試験が行なわれたが、受験したものは昨年の26人に対して今年は35人、とふえている。これについては、現在の不況で求人が例年に比べ非常に少なかったため、国家試験に望みをかけた、という考えがもたれないではない。しかし不況は現在の私達の手ではどうにもできないことであるし、他に道を求めようとしてやった国家試験のための努力と、積極性は買うべきではないだろうか。

いづれにしても、今から卒業までに景気が急変するとは考えられないし、また、ただじっと待っていても昨年のようにはいかないのも事実である。かといって、景気が悪いから、いい所がないから、等と諦めてしまうのではあまりにも情ない。これからも少しずつではあろうが求人があるだろう。今のような不況ではあり、この際、三年生の万々にはあまりえり好みせず積極的に求職に努力し、一日も早く希望を達成してもらいたい。

印象深かった山車

我校最大の年中行事である運動会が去る二十六日秋空の下、盛大に催された。

今回はこの運動会における山車の問題について一言述べたい。

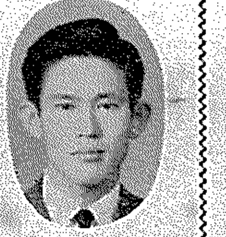
〝恩師と共に〟という名目で毎年我校の運動会をさらに盛りたて最高に人気を呼んでいるのがこの〝山車〟である。高校生活最後の運動会での山車というものは、実際に作ってかつぐ三年生にとってはもちろんであるが、それを見る一、二年生や一般の参観者にとってもいつも、なぜか印象深いものである。

ところが残念な事にこれを作ることにおいては問題が多く、今年も運動会の前日まで先生側と生徒側でもめにもめての結果なのである。というのは、職員側から山車を作る上においていろいろと厳しい規定が出され、これに違反すれば廃止しなければならないという事が言われたのである。しかし、最後の運動会を楽しいものにしようといろいろ趣向をこらしている三年生にとって、あれはだめだ、これはだめだ、と規定されたのではおもしろくない。そこで先生方と何度も話合い了解を求めたのであるが結局認められず、違反した者は退校処分、とまで言われたのでやむなく先生方の言われた規定範囲でやったのである。若高の山車といえば、長い伝統を持ち、若松では一つの名物である。〝山車〟あっての若高の運動会といっても決して言いすぎではない。昔は今とは比べものにならないほどもっと大規模に行なわれていたということである。年々規定が設けられ小規模になっていき、一昨年頃からは〝廃止〟の声さえ聞かれるようになった。昨年は生徒がそれに反対し授業ボイコット騒ぎまで起った。そして今年も、一応行われたのであるが不満がいっぱいだったのである。

こうして多くの問題を残しながらも現在まで受けつがれてきた伝統の〝山車〟はこれからも決して廃止してはならないし、またいっそう盛りたてていかねばならないのではないだろうか。

ともかく問題はあったが、今年も山車は出され三年生の人達にとっても楽しい運動会であったのではないかと思う。

ようこそ先生



幸田先生

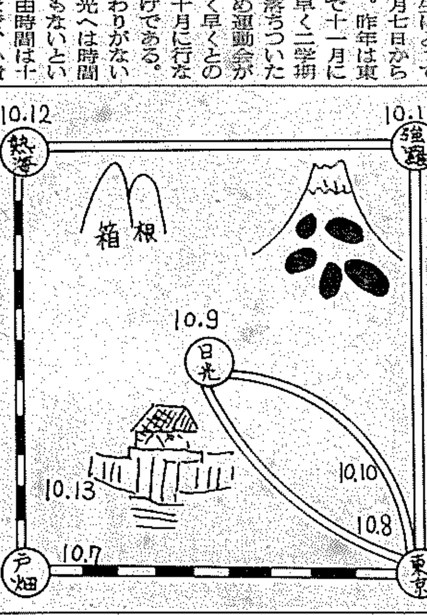
二学期より、二年生の世界史担当として我校に赴任された幸田良宏先生を紹介しよう。京都にある仏教と国史で有名な龍谷大学を卒業後、若高に来られ現在二十三才である。

現在のお住まいは福岡市東箱二丁目で毎日一時間半かかる所から通勤しておられる。趣味はこれといってないが、魚つり、登山と何でもやられるそうで、休日などはギターを弾いたり、友達と議論したりしてすごすそうである。特技として、弓道二段の腕前を持っていられるのには少々驚かされた。理想の女性はと聞くと、可愛い人、ようするに顔ではなく心といわれる。最後に、この学校での第一印象を聞くと、良い環境にあると思ったそうである。

×　×

戸畑発二十二時三十六分

運動会も終り、二年生にとっては待望の修学旅行が十月七日から十三日まで行なわれる。昨年は東京オリンピックの関係で十一月に行なわれたが、今年は早く二学期の主な行事を終らせ、落ちついた勉強の態勢をつくるため運動会が終ったならば、なるべく早くとの学校側の意向もあって十月に行なわれることになったわけである。大体コースは昨年と変わりがないがただ昨年行った奥日光へは時間の関係上行かれそうにもないということである。又、自由時間は十日午後一時半から十時まで、小遣は四千円と、昨年よりはずっとアップされ、二年生にとっては幸いであろう。修学旅行となるとかく気をゆるめがちであるが、教室では学べない勉強、団体としての行動の養成を目的として行なわれるものであり、同列車には戸畑、飯塚両校も同乗するという。日頃団体行動において乱れがちである我校もこれを機会に名誉を挽回し、高校生活最高の思い出となってほしいものである。なお、その間の日程は右のとおりである。



三年　吉田君の話

いよいよ二年生にとって待ちに待った修学旅行であるが、皆嬉しくてたまらない時であろう。経験者として一言いわせていただきたい。諸君に一番守ってもらいたい事は、時間の厳守ということである。特にバスの出発時間、門限は必ず守ってもらいたいものである。役員として一番みんなに要求したいのもそこではないかと思う。

旅行に行くと、はめをはずして遊びたいのもわかるが、そこは修学旅行の意味を考えて自重しながら十分に楽しんでもらいたい。

特製の制帽
片山帽子店
若松区中川通二丁目（丸柏前）

万年筆は信用ある
松永太陽堂
本町銀座　TEL ⑺ 2721

10月10日は〝眼の愛護デー〟です
(若高生に限り期間中1割奉仕
10月5日より10日まで)
アイチ眼鏡店
若松本町七丁目　TEL ⑯ 3312

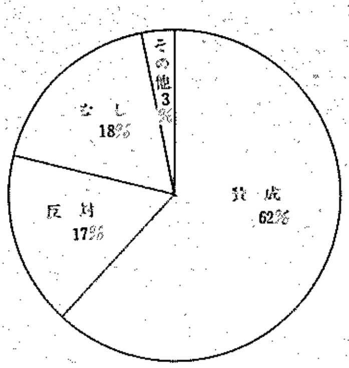
若高生は

ってみたが、賛否両論の争いはなかなか激しい。

賛成意見としてあげられたものの中では、学生らしいから良いというのが圧倒的で、次に、公私の区別がつく、統一感があって良い等の順だった。又、経済的でよいという意見が多少見られたが、これ等は、切実なものとして取り上げられよう。

反対意見としては、きゅうくつである、野暮ったい、個性が生かされない等が多かった。現在のカッコいい若者達にとって、これらは本当に耐えがたいことであろう。

3.制服制度について（一般的な）



悩める若者たち

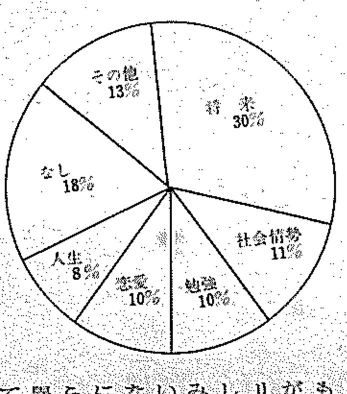
進学問題が一番

結果的にみると、若干、賛成論に押されぎみだが、まず、引き分けというところだろう。

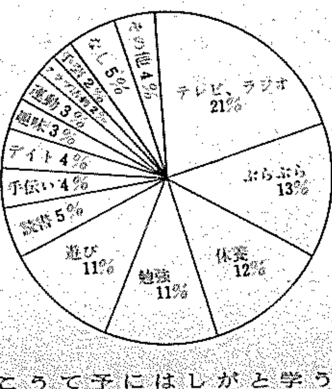
四、現代高校生の日常の思考問題は、果たして?

この項で最も多かったのは、やはり、進路進学についてであった。これは、若松が普通高校であるということからして、極く当り前の結果であったと思う。しかし、中には、修学旅行についてとか、運動会のことを考えているとかいう意見が、若干聞かれたことは、若松生の中にも、小学生並みの人がいるという、悲しき裏付にならざるを得ない。が、これはあくまで若干であって、よせられたアンケートの殆んどが、かなり高い程度のことを考えている。さすがは、若松のエリート達といえよう。進路進学についてという意見が最多数をしめたことは、一部に、若高は予備校化しているという批判を起こさせるやもしれないが、我らエリートは決してそれのみを考えているのではなく、人生についてから、果ては異性についてまで、幅広く思考のわくを広げているのである。社会情勢、特にヴェトナム問題やカシミール問題について、深刻に考えていることも、次の時代をになう若人の、頼もしき姿であるといえよう。

5.最近私はこういうことを考える



4.私は休日をこう過す



3、本校の制服について
（女子の）

冬服　よい 66%　悪い 29%
なし 5%

- ネクタイをした方がいい
- 若々しさがない。型が古い
- スカートを工夫してほしい
- 若高としての個性がない
- 着やすいようにデザインされたものが望ましい
- 活動しにくい（機能的でない）
- 仕立が雑である
- 重苦しい

夏服　よい 51%　悪い 44%
なし 5%

- オーバーブラウスにして欲しい
- 他校と区別がつかない（センスがない）
- 清潔な感じがしてよい
- 学生らしくてよい
- 統一があってよい

五、休日の利用法

待ちに待った日曜日、すべてから解放されるこの一日を、我ら若高生は、どのように利用しているだろうか。これはまさに多種多様であった。

・テレビ、ラジオ

よくみる番組は六項目にあげるとして、これが全体の21%もしめていることには、多少ならずとも驚かされた。日曜には、特におもしろい番組が多いからだろうが。

・ぶらぶらして一日を過ご

が。これが全体の13%、したいことが多すぎて、かえって何も手につかないのだろう。

・休養

前のぶらぶらと混同しやすいがこれははっきり体を休めると決めている所にちがいがある。勉強 運動に追いかけられた一週間、その疲労を一挙に取り去ろうというのか、ぶらぶらに続いて12%。

次に、勉強遊びが共に11%で、これに続く。他、読書、デート手伝い等が見られた。

この結果から見ると、日曜は、一週間の息抜きとしての利用が非常に目立っているようだ。それにしても、本当に意義のある日曜を過ごしているという例が、極めて希なのは、もう少し、反省の余地があるのではないだろうか。

六、テレビ番組

好んで見る番組

この欄は、アンケートの内半分程度しか設けていないが、勿論これは本校生徒のテレビ視聴状況を調査するために加えられたのだが、我々の予想に違い、実に多彩であった。幼児向けマンガから、深夜劇場まで昼の奥様向け番組を除いてほとんど全ての番組が出されていたのである。

しかし多くの番組の中でも皆健全なものと思われることは、まあまあよい傾向である。それにしてもニュースあるいは、テレビ英語会話、それに最高の良識番組と言われている弁護士プレストン等々のかかさず見る番組の中にはわずかしかみることができないことはやや失望させる。もう少し教養番組をよく見て欲しいと思う。我々はもはや高校生だし、決して内容的には難かしくもない。

若高生はテレビがお好き

4、いちばん好きなテレビ番組

①マンガ
②七人の孫
③歌
④太閤記
⑤0011ナポレオンソロ
⑤ニュース
⑦サンセット77
⑦バージニアン
⑨勝抜きエレキ合戦
⑨陽のあたる坂道
⑪ペイトンプレース物語
⑪徳川家康

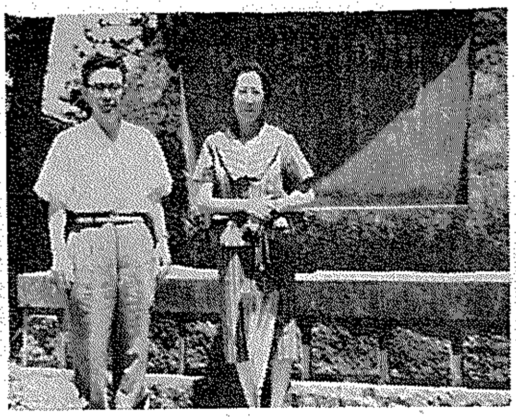
先生宅訪問

主人は嘘を申しません

教頭　藤井先生の巻

今回は、秋晴れの空いっぱいに応援団の太鼓の音が響きわたる日、校内の藤井先生のお宅を訪問した。出身地は鞍手郡、出身学校は東筑中学を卒業、東京玉川大学に進まれた。東筑時代は放課してから列車の時間迄の一時間半を運動に熱中され、特に器械体操を得意とされていたそうだ。（先生に似てお子さんも運動好きのようである。）「そのころの中学（現高校）は課外もなく、勉強や試験に追いまわされるようなことは全くなく、のびのびと自由に過せた。」となつかしそうに語られた。そこで現在の若高生に対する要望を聞いてみると、「よく勉強するが何事にも自分から進んでもっと積極的に自主的にやって欲しい。それに、ファイト、根性っていうのかそういったものが足りないように思える。他校との試合などの場合、先手を打っている時はよいが、逆に先手を打たれると、ファイトを失ない負けてくる。もっと根性があって欲しいなあ……。」となかなか手厳しい批判をされた。しかし、生徒会などの生徒活動を支持され、また、「うちの学校程やっているところは少ないだろう。」と誇らし気におっしゃった。

教師になられて三十一年目、これといった動機はなく、御親類御両親が皆教員だったため、自然と先生もその道に入られたそうだ。若高に来られて二十五年にもなられる。昭和十六年頃の女学生のセーラー姿を思い出している風だった。



お話を伺っていて、時代の変化と共に『学生らしい生活』も変ってきていることを感じた。ここで奥様に登場していただき家庭での先生の御様子を伺ってみた。

「そうですね…。優しくて、子煩悩ですね。小さなことに余りこだわりませんが、お客様に対して少しでも礼儀に反するような態度をとれば後で叱られますね（私達が丁重にもてなされたことはいうまでもあるまい）それから、嘘を絶対に言いませんね。碁が好きなもんで、宿直室で遅くまでやっている時があるんですよ。そんな時、学校の用事で遅くなった言えば私も腹は立てないのに、すぐ本当のことをいうので……。」先生のごまかしの嫌いな性格、人生に対して真面目な態度を奥様から知ることができた。

先生が人生のモットーとされている〃それぞれの人の、それぞれの場で誠意をつくす〃ということは家庭内での立場、教師としての立場、務めをりっぱに果されている先生としては当然なことなのであろう。

色々お話を伺っているうちに時間になり、おいとますることにした。私達のためにこれからもよき指導者であられることを希望してやまない。

ちょっと一言

感じませんか?

よく見かけることで、授業中に鉛筆をゴリゴリと削り出す人がいる。削っている本人は、きっと悪気があってしているのではないだろうが、他の人にしてみれば、迷惑なことである。本人にしても削っている間は先生の話を聞き流していることになる。

ここで、何のために休み時間があるのか、ちょっと考えてほしい。休み時間というものは、次の授業に対して生気を養うだけの時間ではなく、必要な準備をするということも休み時間内でする大切な要素である。準備などしない人に限って、鉛筆を授業中に削り出す。その人達が休み時間を遊びに使わず、ほんのちょっと時間の一部をさいて鉛筆を削れば授業中に削らなくてよいし、みんな気持よく授業が受けられるはずである。これは何も授業中に鉛筆を削るということだけにこだわっているのではないので、準備をしていないために、他人にも自分自身にもマイナスになるのである。

何をするにしても、準備ということは、物事の基礎なのであって一番大切なことで、それを皆は忘れているのではないでしょうか。

English Comicality

—An Illiterate Cat—

Mother (to her little daughter who is crying bitterly over her lost cat) : "Don't cry any more." "I'm going to ask daddy to put an advertisement in the newspaper."

Little girl : "That's no good, because because Tama can't read."

E•S•S

「つぶて」
原稿募集
文芸部

画材と額縁
アルバムと室内装飾品
野中響美堂
若松区本町六丁目
TEL ⑯ 4818

辞典と参考書
石松書店
本町六丁目　TEL ⑯ 2415

香りと 味の お茶の店
松井松緑園
本町丁目　TEL ⑯ 2649

服飾材料専門店
手芸講習毎週金曜日
午後2時より
7時まで
しらき
若松区明治町三丁目
TEL ⑯ 3686

文芸

風船

原口悦郎

放たれた風船がありました
大空に高く高く上がってゆきます
「そこを通してくれよ」
「だめだね」
その時強い風がふきました

風船はどこか知らない所におりました
青い大空を見つめてため息をつきました
風船は下を見ました
知らない街
知らない野原
ただそれだけ
風船は満足しました

上村義徳

朝日が竹林を射て
すべての葉の先端を
するどく光らせる
あの美は皆のものだ
哀しいけれども
やはり幸福の方をより多く感じる

落葉

富士次郎

枝に力いっぱいひっついている葉
冬近くなり落ちてしまう葉
我　一葉なれど
　木を繁らす
我　一葉なれど
　木を育つ
だが朽ちる
そして　落ちる

「怒りの葡萄」を読んで

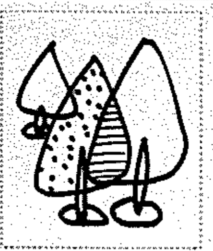
一年五組　城島希代子

—朝、砂塵は霧のように漂っている。太陽は熟した新しい血のように赤い。一日じゅう砂が空から降る。そして、つぎの日も降りつづく。かくして一つの平たい毛布が地上を覆う。それはとうもろこしの上につもり、柵の頭の一つ一つにつもり、柵の針金にもつもる。屋根に降りしき、雑草や樹々を覆う。第一章を読み始めたときから、何かを暗示するようなこの息苦しい光景に、異様な感じを覚えた。そして私の好みの書でないことを感じて、読むのをとまどってしまった。しかし、かたよった読書をするのはやめよう、何でも一応は読んでいこうという気を起こして、私は読み進んだ。しかし読んでいくうちに、私はこの小説の強烈な印象にぐいぐいひっぱられて、時間のたつのも忘れて読みふけった。そして、読み終えた時には、何か大きなものが私の心を包んだような気がした。私はこの書をよんで、今まで読んだ作品とはまったく異なった、スケールの大きい強い感銘を受けた。

この小説の背景をなす一九三〇年代の混乱したアメリカ商業主義。私はここに資本主義社会の矛盾をみた。資本家たちは毎日、贅沢に暮らし、ますます富むことを願い、利己的な利益を望む。片方では、働いても一日分の食事にもありつけないほど、飢えに苦しむ貧しい人たち。そして資本家は少数で、貧民たちは何百万。貧民たちが暴動を起こさないようにと絶えず圧迫を加える資本家。資本主義社会の悲しい現象に私は怒りを覚えた。作者は冷然とした態度で、この混乱した当時のアメリカ商業主義への強い怒りを描きあげている。この小説ほどの書はないにしても、現在の社会でもこうした矛盾が多くみられると思う。この私の悲しい怒りを救ってくれたのは、登場人物ジョード一家の支柱となっている母親であった。だれにでもへだてなくわけ与える大きく強い愛。どんな苦しみ、悲しみ、圧迫にあっても生き続けようとする、たくましい生命力。どんな生活の中で、いつも自分のことよりみんなのことを考え、先頭に立って一家を励まし、勇気を与えた、偉大なる母親がいなかったら、ジョード一家もバラバラになっていたと思う。私も、この母親の超人的な愛、生命力をひとかけらでも持ちたいと思う。しかしながら、この小説を読んで、一番感動し、また考えさせられたことは「生」ということである。次の文はこの小説の結末である。

—「シャロンのバラ」は、ふとんの一方の端をゆるめて、乳房を出した。「飲まなくちゃいけないわ。」と彼女は言った。「さあ」彼女の手は、男の頭のうしろにまわされ、それを支えた。そし指は、やさしく彼の髪をなであげた。彼女は納屋を越えて、向うを見あげた。彼女の唇は結ばれ、神秘な微笑をうかべた。—

これはジョード一家が洪水に追われて、雨の中を一軒の納屋に逃げこんだところ、その納屋の片隅に、やはり彼らと同じ浮浪労働者が一人、飢死しそうになって横たわっている。その時、赤子を死産したばかりで胸の張っているローザシャーンが、常識では考えられないこと。その浮浪労働者に自分の乳房をふくませて助けるところである。このあと、このジョード一家を通して「人間というものは、どのような苦難にあっても生きつづけてゆくものだ」という作者スタインベックの信念が、私の心をはげしくゆさぶったのである。実感としては「生」というものが、わからないけれども「生きる」ということが、どんなにむつかしいことか、そして、どんなに大切な人間の権利かということをこの書を読んで、おぼろげながら教えられたような気がする。私は青年期にこの書を読んだことをほんとうによかったと思っている。



国木田独歩

三年四組　古城妙子

私は「源をじ」から独歩に入りました。初めは文章の美しさに感動しました。実は、文章が美しいなどと感じたのは、この時が初めてです。私は漱石によって日本文学の偉大さを知りましたが、日本文の美しさを教えてくれたのは独歩です。彼の文には技巧らしい技巧がありませんが、その無技巧の美しさが魅力なのです。私は酔うように読みました。「武蔵野」「忘れえぬ人々」……そして今度、自然主義だと言われる「運命論者」を読んだのですが、これが花袋や上田秋成などの仲間に入れられるのはなぜでしょうか。彼等は人間を描くのに人間から遠く離れているように思えますが、独歩は人間のただ中にいます。

ただ「運命論者」においては、生母に捨てられ、やがてその娘、つまり義妹を妻としてしまった男の、運命に打ちひしがれた姿を描いて人間の〃どうしようもない悲哀〃というようなものを強調しているようですが、それにしても人間に対する愛の態度は少しも変っていないでしょう。

今まで私にとって読書は学習と同じ意味を持っていました。作者は教師でした。しかし独歩の作品はそういう目では読めません。彼は教えようとしているのではなく?訴えているように思えます。訴えるというのも、これはいけない、こう生きるべきだというのではなくて、悲しみや、悩みや、そういう感動が、もうどうしようもなくて、手のひらからこぼれ落ちて来るのです。私はそれを拾うのですが、その一つ一つに頭を下げたいような気持になります。その落ちて来る玉が、人間愛の結晶だからです。人間をこれ程思って筆を取ってくれる人がいるということが、ほのぼのとした安心を与えてくれるのです。

展示内容に興味を

—他校の文化祭を見て—

去る九月四日、我々新聞部員七名は戸畑中央高校の文化祭を訪れた。以下その時のもようを六月開かれた本校の文化祭と比較しながら述べてみよう。

まず第一に感じたことは、各クラブの展示内容に興味をひくものが多かったことである。本校にも若干あるにはあったが、戸畑中央高校の方が多かったようである。たとえば、登山部では気分を出そうと模型を作ったり、飾り付けや服装にも気を配っていたし、写真部では、動乱のベトナムを扱った写真を展示したりしていた。それに対して、本校は少々平凡すぎた感があったようである。もちろん例外もあったが……。

次に展示の仕方であるが、本校に比べ、場所を広く使い、見やすく展示してあったようである。そのため、展示物の数も多く、美術部等は、本校の二、三倍近く展示していたようである。これはクラブ数の多少にもよるであろうが、いずれにしろ、内容は充実していたようである。

難をいえば、会場から会場へと移動する通路が狭く、行動しにくかったようである。本校と違ったクラブとしては、地理部と同様な趣旨をもつ郷土部というものがあった。又、女子の比率が大きいせか、全体に女子部員の活発さを感じた。

その他異なっていた点といえば、バザーがあったことだろう。入口近くにあった会場から流れてきた香りは快いものであった。我々はその香りを自分のものとしないまま、なごりを残して戸畑中央高校を後にした。

×　×

クラブ訪問

行くぞ！甲子園

野球部

澄みきった秋空に快音を残して白球は弧を描いて飛ぶ——われらの若高野球部は、夏の大会が終わると、すぐ、新メンバーを編成し、来春の選抜野球をめざして、目下、猛練習を重ねている。

ことしの夏もよくがんばった野球部。甲子園へもう一息というところだったが、二年生を中心としたチーム編成は、むしろ来年度をめざしたものと思われる。

果せるかな、夏のシーズンが過ぎ、新秋に入るとともに、戦えば勝つというめざましい躍進ぶり、早くも来春の選抜野球出場の可能性が濃厚になってきたようである。

毎日、三時間、球が見えなくなるまでの猛練習。

部長定司先生、上地監督のもと、中江新主将を中心に、団結も固く、グランドをかけまわる選手たち。

今日も今からちょうどグランドにかけつけるところであった。部長をつかまえてちょっとインタビュー。

修学旅行にも行かないということですが、本当ですか？

「十月三日の試合がすむと次の試合は十月十七日なので行くことができるようになりましたよ。しかし帰るとすぐ試合だから、道具をもっていき向うで軽いトレーニングをするつもりです」

甲子園は大丈夫でしょうか…

「もちろん」（答えはただの一言であった）

全校生徒に望むことは…

「もっと大勢の人に応援にきてほしい」

そばから定司先生が「部員の少ないのが悩みでね……」

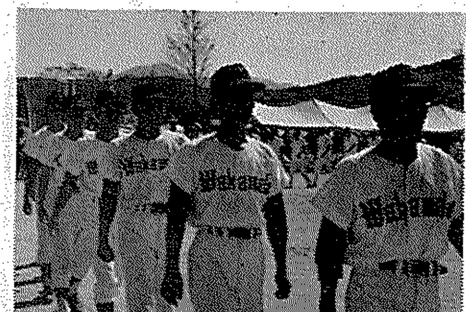
それだけに、ひとりひとりがけがや病気をしないように気をつけてもらいたいものである。

現在までに、小倉・東筑・下商・戸畑・八工など強敵に次々と打勝ち、すでに十勝一敗一引分の好成績——どうやら大きな期待がもてそうである。夢にみていた甲子園、その夢が今、まさに実現しようとしている。長い間の苦心がようやく実り、「若高強し」の声は高い。千六百の全校生をバックに今度こそぜひ甲子園に送りたいものである。

さて現在の日程は、先日、三日の試合（対小倉商、7対0 勝）に続く十七日の対戸畑戦です。

では現在の部員を紹介しよう。

投手　武部（二ノ八）
鎌田（二ノ七）
藤勝（二ノ五）
捕手　中江（三ノ七）
川下（二ノ十）
内野手　浜内（三ノ八）
青木（二ノ一）
国部（一ノ二）
河野（二ノ五）
三好（二ノ九）
角（二ノ四）
外野手　大庭（二ノ八）
高野（二ノ七）
岩見（二ノ八）
藤岡（一ノ七）

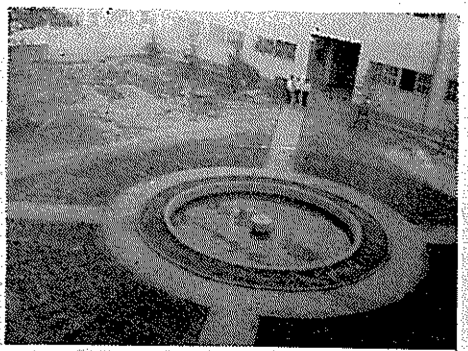


花壇完成

生物部

今、中庭の花壇造りで活躍している生物部を紹介しよう。私たちが生物部を訪問した時、ちょうど部員の皆さんが泥まみれになって花壇を造っている最中であった。部員数は約三十名で女子の部員は数人、と男子部員が圧倒的に多い部である。この大世帯を部長の真鍋さんはうまくリードしてクラブの雰囲気はいたってなごやかである。現在主な活動としては淡水プランクトンの研究と前に述べたように中庭の花壇造りで、植える予定の花は菊・パンジー・デージー・金魚草・ルピナス・水仙・アイリス等だそうだ。花壇造りについては自主的に行なったものだが、植物班だけでは足らないので今は全員でしているが、これから先世話をするのに希望者があれば協力して欲しいといっていた。

これからの計画はという問に対して、「鳥や動物を飼って研究したり、温室を造ってもらって、いろいろな種類の花を栽培したい」と語っていた。これから先の生物部の前途に幸いあることを祈って別れを告げよう。



編集後記

どうです皆さん、今度の新聞は！インド人もビックリ級？のおどろきをされたのではないかと思います。従来のブランケット型の新聞をやめ、新しくタブロイド型の新聞を出すことになりました。というのは、手に取って読みやすいばかりでなく、紙面を縮少した分だけ枚数が増えて新聞らしくなるのではないかと思われたからです。しかし、初めての型なので割り付けに大変苦労しましたが、まあまあという出来です。

あ、それからアンケートのことですが、真面目に解答をしてくれた人が何人いるでしょうか。アンケートの集計を取っていくうちに非常に悲しくなりました。これが若高のエリートの実態か？若高生よ自覚を！

寝装品専門
板垣フトン店
本町四丁目　TEL ⑯ 3777

御菓子司
と　き　わ
明治町四丁目　TEL ⑯ 1421

撮影・D・P・E
大和写真工芸
若松区小石峠　TEL ⑰ 3173